老朽原発うごかすな！ニュース

第１１２号

発行・老朽原発うごかすな！実行委員会

［連絡先］
090-1965-7102

いのちの海を守れ！　さようなら上関原発！
10・22反原発デー県民集会」報告

２００人の熱気にあふれた会場

１０月２２日（日）、標記の県民集会が上関町総合文化センターで開かれ、２００名入る会場は満員だった。

司会は原水爆禁止山口県民会議が行い、まず主催者挨拶として「原発に反対する上関町民の会」「上関原発を建てさせない祝島島民の会」「上関の自然を守る会」が登壇した。４１年間上関原発建設を阻止し続けてきた結果、原発推進・反対の垣根を越え原発に頼らない町づくりをしていこうとしているところに、中間貯蔵施設建設計画が浮上してきたこと、原発は推進していても中間貯蔵施設には反対の町民がいること、地元の自然に自信を持ちだしていることなどが語られた。

特別報告では、中間貯蔵施設について末田一秀さん（はんげんぱつ新聞　編集長）が丁寧に話して下さった。危険な核のゴミを集め収容することの危険性、核燃料サイクルが実現性のない行程表を公表していること、キャスクの耐用年数が５０年～６０年しかないことなど聞けば聞くほど中間貯蔵施設を作らせてはいけないと思った。

その後、連帯アピールや集会アピールがあった。老朽原発動かすな！実行委員会からも連帯メッセージが届いた。集会終了後のデモ行進では沿道から「応援しちょるぞ」「同じ気持ちやけぇの～」などの声がかけられた。

核のゴミのキャスクを一端受け入れたら最後、それを搬出する計画は今のところない。将来的にもできないだろう。参加者の中には幼い子どもを連れた方の姿もあった。私は後５０年も生きることはないが、その子どもたちは生きている。その子達が大人になったとき、何を残すかをしっかり考えたいと思った。

（山口被爆二世の会　寺中千尋）

世界有数の豊かな瀬戸内海
数多くの生命を奪う原発などいらない！

原発の近くで、大いに盛り上がるみなさん

伊方集会はチェルノブイリ事故に衝撃を受け、翌々年から毎年原子力の日に近い日曜に行われてきた愛媛で最も続いている集会で、今年で３７回を数える。日本一長い佐田岬半島の付け根に位置し、日本一の中央構造線の真上にある危険極まりない伊方原発に反対、抗議する集会である。四国全県や周辺地域から原発反対の仲間が集まる集会で、四電に対して抗議文や要請文を突き付け伊方原発の運転停止、廃炉を要求、原発反対の意志を内外にアピールする目的で続けられている。

今回は東京から２つ、老朽原発に反対する関西の団体から連帯メッセージが届き、四国各地や大分からも抗議文や要請文が提出された。今年は大阪や上関での集会が重なり参加人数の減少が予想されながらも、愛媛県内から新顔の参加者が何人も見え、約５０人の参加で伊方ならびに全て

「１０・２２使用済み核燃料の行き場はないぞ！全国集会」集会決議

岸田政権は、福島原発事故から12年を経た本年5月に、原発関連法を改悪し、「原発依存社会」に向かって暴走しています。また、8月には福島県や全国の漁連をはじめ、国内外の反対の声を無視し、福島原発に溜まり続けている放射能汚染水を、「処理水」と言い換えて、太平洋に投棄し始めました。一方、原発推進へと暴走する政府のお先棒を担ぐ関電は、若狭の老朽原発３基を再稼働させました。福島原発事故の教訓をないがしろにし、世界の人々の脱原発の願いを蹂躙するものです。

ところで、関電は、「2023年末までに、使用済み核燃料の中間貯蔵地を福井県外に示す。示せなければ老朽原発を止める」と福井県知事に約束していますが、未だに候補地を見出せていません。現在、関電の原発燃料プールの約８割が埋り、3～7年後にはプールは満杯になるため、原発を止めざるを得なくなります。切羽詰まった関電は、「保有する使用済み核燃料のわずか5%のフランスへの搬出」を発表し、これで約束を果たしたとしています。さらに、関電と中国電力（中電）は結託して上関町に中間貯蔵地建設のための調査を申入れました。原発建設に反対し、瀬戸内海の美しい自然と希少な生態系を守る住民の心情を逆なでする関電と中電を、全国の反核運動の連帯によって糾弾しなければなりません。なお、上関の西町長は、申入れからわずか16日後に調査受け入れを表明しました。悲しくも提示された補助金に飛びついたのです。

このような使用済み核燃料の中間貯蔵に関する対応について、福井県から説明を求められた関電は、今月10日、青森県の再処理工場の活用、中間貯蔵施設の確保を盛り込んだ工程表を示し、搬出の円滑化のために原発構内に乾式貯蔵施設の設置を検討するとしています。関電が示した工程表は、国策である核燃料サイクルが、近々動き出すことを前提に策定されていますが、再処理工場稼働の見通しはなく、「絵に描いた餅」です。しかし、福井県知事は13日、これを容認しました。「原発の運転継続ありき」の出来レースです。

原発関連施設の建設は、過疎化や財政難を抱えた地域に、交付金をチラつかせて押し付けられました。関電が中間貯蔵地として狙う、むつ市や、上関町もその例です。しかし、一旦誘致すれば、自然破壊、地域産業の衰退を招き、交付金に頼るしかない状況に陥ります。住民の分断も生じます。原発を推進したい政府や電力会社の巧妙なワナです。このようなことを繰り返させてはなりません。

本日、関電前の全国集会に結集した私たちは、全国で脱原発を闘うみなさんと連帯して、使用済み核燃料の行き場はどこにもないことを、改めて確認しました。

まず、使用済み核燃料の発生源・原発を全廃し、使用済み核燃料の処理、処分について広範な議論を巻き起こしましょう！

関電と福井県の「出来レース」を糾弾し、老朽原発を廃炉に追い込みましょう！

原発推進関連法は、先の通常国会で成立しましたが、実行するには、関連の法体系の整備が必要です。また、法をどのように解釈・運用するかは反原発の行動との攻防によって決まります。原発推進関連法を実行させない、目に見え、耳に聞こえる闘いを前進させましょう！

原発を全廃し、安心、安全な明日を築くために大きく前進しましょう。

以上、決議します。

2023年10月22日

「使用済み核燃料の行き場はないぞ！全国集会」参加者一同

の原発に対する反対の意志を挙げた。伊方原発ゲート前からは瀬戸内海が一望でき、上関原発建設予定地の祝島も見える。この世界有数の豊かな瀬戸内海、閉鎖性海域に原発から放射能と温排水がおびただしく垂れ流され、事故が起きなくても数多の生命が奪われ、被曝労働を強制される労働者なくして稼働できない原発の例えようのない犯罪性、全ての生命の生命権が脅かされ続けることへの抗議、この地に核燃料廃棄物を置き続けられる危険性が訴えられ、私達原発反対住民の心底からの怒りが四電に叩きつけられた。午後は場所を変え、室内で各地の運動の報告やこれからの運動に対する方向性が議論され、久々に会う仲間同士の交流がなされた。継続は力、連帯こそが勝利への道と確認、各地へと別れ集会を終えた。

（原発さよなら四国ネットワーク　井出久司）